

<b>Title</b>	日本における青年期の研究について
<b>Author(s)</b>	山田, 麻有美
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 23(2) : 183-190
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2776">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2776</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 日本における青年期の研究について

山 田 麻有美

A Review of Research of Adolescence in Japan

Mayumi YAMADA

This is a review of research into adolescence, a period of changing from a child to an adult, in Japan, which endeavors to explore subjects which might be important in elucidating the nature of adolescence. In this review, three areas are highlighted: when the concept of adolescence was first recognized in Europe and Japan; features of contemporary Japanese adolescence; and the importance of common sense for today's Japanese adolescents. It is suggested that cultivating common sense is important for modern Japanese adolescents who are fearful of the difficulty of becoming adults.

---

**Key words;** adolescence, common sense, adult, child, a period of changing

**Key words;** 青年期, 共通感覚, 大人, 子ども, 移行期

### 1. 「青年」に対する関心の発生

一般的に大人と子どもの中間の時期を過ごしている人を「青年」と呼び、この時期を青年期と呼ぶ。児童期から成人期に至る過渡的な時期にある人々をさして「青年」と呼ぶのである。この子どもから大人へ移行する過渡的、中間的な時期に位置する「青年」の様相は多様である。「青年」は、生物学的にも社会的にも認知的にも著しく変化する。それゆえ、「青年」の研究は多様である。

この「青年」という過渡期的中間期に関心が寄せられるようになったのは、ヨーロッパでは18世紀後半、日本では19世紀後半とされる。

18世紀前半まで、人は、通常、社会の中での存在であった。その人が生まれたその社会の中でのみ生きていた。個人の欲求や感情は生きる上で重要とはされなかった。その人の生き方に、その欲求や感情が反映されることはなかった。その地域社会で生活を立てている年長者の姿は、そこに生まれ育つ者に生き方のモデルであり、その行動を模倣することで自分も生きていくことができるとい

う安心感や自信を育むものだっただろう。

18世紀後半にイギリスで起こった産業革命は、多くの若い働き手を賃金労働者として、その生まれた社会から引き離すもとなった。多くの若い人は、地域社会から離れ見知らぬ人々や地域、新しい仕事に直面することになった。その新しい仕事は誰にでもできる単純な作業であり、劣悪な環境での長時間労働を強いるものであった。そのような仕事は、若い働き手に生き方のモデルを提供するものではなかったし、見知らぬ土地の見知らぬ人々は、地域社会から離れた若い働き手の生き方のモデルにはなり得なかった。それは若い人々が自分の将来に対する確信が持てない不安な状況であっただろう。

賃金労働者として都市に移り住み、劣悪な労働環境で長時間作業をし続ける18世紀後半から19世紀のイギリスの若い働き手たちの多くは、地域社会から離れただけでなく教会からも離れて拠りどころを失い、放縦な生活を送るようになった。生き方のモデルを失い、将来の見通しもない状況におかれた若い人々の生活は、生きることに大きな不安を抱えて荒んでいったという。生きる目標を失い空虚な時間を過ごすうちに、若い人々には自分の欲求や感情が比較的大きなものとして意識されるようになったであろう。若い人々が欲求や感情のままに、刹那的に生きるようになったのは当然かもしれない。このような多くの若い人々の無秩序な生き方に秩序を取り戻したいと、ジョン・ウェスレーはメソジスト運動を興し、また若い人々の、spirit（精神）の涵養とmind（知性）の向上、body（身体）の鍛錬をめざして、ジョージ・ウィリアムスはYMCAを設立した。

ヨーロッパにおいて「青年」に対する関心が発生したのは、このような社会的な変化により、多くの若い働き手の間に、生きる不安が生じ、その人々の生活が欲求や感覚を中心と生き方となっていく、大人だけでなく同世代人の眉を顰めさせるようになっていったことが契機だったといえるだろう。産業革命という社会の仕組みが大きく変化した時期に、生き方のモデルを提供できなくなった大人が、生き方のモデルを失って大きな不安を抱きながら感情や欲求のままに生活している「青年」の姿に気づいて、「青年」という存在に関心を寄せ始めたのである。こうしてヨーロッパでは、社会的変化に伴い自然発生的に、子どもでもなく大人でもない人々として「青年」という括りが生まれた。つまり、ヨーロッパでは、子どもでもなく地域社会の中で安定した生き方をしている大人でもない、中間的な若い人々である「青年」が、まず存在したのである。この「青年」に社会が関心をもち始めたことで、子どもから大人への移行する時期としての青年期というとらえ方が出てきたのである。

一方日本において、「青年」という言葉を用いた著作が刊行されたのは、徳富蘇峰による「新日本之青年」（1887）が嚆矢であろう。

19世紀前半まで日本では、多くの若い働き手は、生まれた地域から移動することなく、年長者を生き方のモデルとし、伝統的な地域の一員として生きていた。各地域の若者組へはおよそ15歳で加入したということだが、若者組への加入が一人前の大人とみなされた。明治時代以前の日本で15

歳は一人前の働き手であり、大人として扱われる社会であったと考えられる。つまり、それまで日本には、「若者」とか「若衆」という若い働き手は存在したが、子どもと大人の間的人としての「青年」は存在しなかった。

19世紀後半、西欧文化の取入れをめざした日本は、子どもから大人への移行期の人々が、取り入れた西欧文化を担う一人前の働き手となるために、学校という制度を整備して、できるだけ多くの子どもが大人になるまで何らかの教育機関に所属できるようにした。学校という制度は、移行期の人々「青年」に生き方のモデルを提供し、指導助言を与え、訓練してくれるものとして作られた。つまり、それまでは、親や地域社会が担ってきた子どもを一人前の働き手として育てることを、学校制度に委託したのである。

このように日本では、子どもから大人へ移行する若い人々を対象に学校という制度が作られ、その制度が「青年」という、子どもでもなく大人でもない人々である「青年」を生み出したのである。日本における「青年」は、社会の変化に伴い自然発生的に出現したのではなく、制度によって作り出されたのである。それゆえ、日本の大人の関心は、「青年」という人々に向けられず、制度に向けられていた。

それぞれの学校には、指導要領や教科書といったマニュアルが整えられた。指導要領は、子どもが西欧文化の担う一人前の働き手となるためのみちすじを示したものであり、教科書は子どもがそのみちすじに沿っていくための材料である。各学校の教師がそれらに基づいて指導助言すれば、子どもが西欧文化の担う一人前の働き手になれるように、よく考えられ計画されたマニュアルである。段階的に整えられた材料を手がかりに、教師の指導助言に沿って行動していれば子どもは、いつしか西欧文化の担う一人前の働き手になっている、ということになるように計画されている。しかし指導要領や教科書は、「青年」に生き方のモデルを提供するものではない。

日本では1872年学制頒布以後、学校制度が急速に整備され、学校教育が普及していき、現在では日本の「青年」の多くが何らかの学校に在学するようになった。平成21年度文部科学省学校基本調査によると、中学校卒業者の高等学校への進学率は97.9%、高等学校卒業生の高等教育機関への進学率は77.6%に及んでおり、13歳から20代前半の「青年」の大多数は、何らかの教育機関に在学しているのである。

学制頒布以降、日本の大人は、「青年」それ自身に関心を寄せるのではなく、学校制度や教育課程、教授法、あるいは学校生活上の問題に関心を寄せてきた。学校制度を整備し、教育課程を充実させ、効率的な教授法を開発し、学校生活上に問題のある「青年」に対する適切な処置を行うことが、子どもを西欧文化の担う一人前の働き手、社会の一員とすることに重要なことだと考えてきたのだろう。

しかるに、日本の大人が整備し充実させてきた制度としての学校の中で、予測していなかった様々な事態が生じてきた。一例をあげれば不登校という事態である。日本の大人が、一人前の働き手に

育てることを委託してきた制度としての学校に、所属しようとしなない「青年」が出てきたのである。この問題は半世紀ほど前から日本で取り上げられている。病気でもなく、怠学でもないのに「青年」が学校に行かない状態を、当初は、「学校恐怖症」と呼んだ。「学校嫌い」といわれたこともある。文部科学省は、1966年から1990年までは年間50日以上、1991年以降年間30日以上欠席した児童生徒を「学校嫌い」あるいは「不登校」として統計をとってきた。公表されてきた中学校における不登校生徒の割合は、1966年から1980年までの15年間は約0.2%前後で推移したが、その後徐々に増加し1993年には年間50日以上の欠席者数が1%を超え、1998年以降は年間30日以上欠席者数が2%以上で推移している。特に2001年以降の10年間は2.7～2.8%となっており、減少傾向はみられない。その他、怠学や退学、いじめ、校内暴力、学級崩壊など事態も、日本の大人が、一人前の働き手に育てることを委託してきた制度としての学校の中で生じている予期せぬ事態であろう。

制度としての学校に係る、教師、親、研究者、教育行政に携わる者などの大人は今、学校の中で発生している、不登校をはじめ、いじめや、学級崩壊、校内暴力、怠学と退学という予期せぬ事態に直面し、その原因を解明し、解決方法を見いだそうと努力している。今生じている様々な予期せぬ事態が、大人を、「青年」に関心を寄せざるを得ないようにしているのだ。一旦学校制度の中で生きられなくなったり、生きることをあきらめたりした「青年」は引きこもりやNEETと呼ばれる状態となることもある。そのような状態の「青年」には、学校に係る大人だけでなく、社会全体の問題として関心を集めている。

このような制度としての日本の学校で「青年」に生じている事態は、制度としての学校が提供していない生き方のモデルを「青年」が見いだせない状態であることを示すといえるだろう。学校という「青年」のみを集めた特殊な社会の中で、生き方のモデルを見いだすことができず、将来の見通しもないまま学校という社会で生きなくてはならない「青年」は、生きる目標のない空虚な時間を、大きな不安を抱えながら過ごしているのだろう。そのような「青年」は、自分を取り巻く周囲からの働き掛けを意識するよりずっと強く、自分自身の中からわき起こってくる欲求や感情を意識するようになる。自分の欲求や感情にのみ注意を払い、一瞬一瞬それらを満足させるために行動するようになるのは当然であろう。産業革命以後のヨーロッパの「青年」が生き方のモデルを失い、荒んだ生活を送るようになったのと同じ現象ではないだろうか。

20世紀後半になってこのような状況に直面し、ようやく日本の大人は「青年」そのものに関心を示すようになってきたのである。

## 2. 日本における青年期

心理学に、人の一生をいくつかの時期に分けて、それぞれの時期に特徴的にみられる心理的現象

とそのメカニズムをとらえようとする分野がある。発達心理学である。その中で青年期という時期は、様々な側面で著しい変化がみられることを特徴とする時期であるにとらえられてきた。生物学的な側面では急激な身体的変化の時期であり、認知的な側面では獲得してきた表象を操ってより複雑な事態を理解し対応することができるようになる時期であり、社会的側面では活動範囲が広がり、多様な状況に応じる経験を積み重ねる時期であると考えられている。

青年期という期間はおよそ10～20年と考える心理学者が多い。青年期の始まりは、身体的には身長や体重の急激な増加と第二次性徴とがみられ、心理的には抽象思考が可能となり、それらの変化を土台に社会的活動の範囲が広がり始める時期とされる。年齢的には、11～12歳ごろが青年期の始まりである。そしてこれらの身体的、心理的、社会的な著しい変化が収束し、落ち着いた社会生活を営むことができるようになるのと青年期が終わるとされてきた。身体的な著しい変化が収束するのは16～19歳ごろであるが、それと青年期の終わりが一致しないことが多い。身体的な変化が収束した後も、生き方についての心理的葛藤が続き、安定した人間関係を構築することができないと、青年期は続く、とされる。また、自らの生き方についての心理的葛藤の程度や持続期間は個々の「青年」によって異なる。生き方のモデルをいち早く見いだすものもあれば、時間がかかるものもある。そこで、青年期が終わる時期は個々人で異なると考えられてきた。

青年期に「青年」が直面する心理的葛藤とその克服や、安定した人間関係の構築は、「青年」の発達課題である。子どもから大人へ移行するということは、この発達課題を達成するということである。

近年日本では、心理的側面や社会的側面での変化が収束しないまま年を重ねる「青年」が出現している。身体的には一人前でありながら心理的離乳ができない「青年」や、自立した社会生活を営むことができる状況でありながら居心地のよい家庭を離れようとしなない「青年」、学校という社会から離れることを恐れる「青年」など、大人に移行しない「青年」が増加する傾向にある。子どもから大人への中間期であり、本来通過していくはずの移行期に「青年」がとどまり続けるのである。青年期が終わらない。

今、日本では、多くの「青年」が大人にならないのである。「青年」が大人にならないのはなぜだろうか。「青年」が大人に移行せず青年期にとどまるのは、どのような原因があるからなのだろうか。

日本では19世紀後半から、若い人々を西欧文化の担い手とする方法として学校という制度を確立し、委託してきたことは上に述べた。学校という制度が若い人々に生き方のモデルを提供するものではないことも指摘した。子どもに、学校は大人になるまでの手順は提供するが、生き方のモデルは提供しない。どのような大人になるかは子どもが決めることだから。学校は子どもに次に進むことのできるみちすじに関する助言は行いが、大人として生きるモデルを提供することはない。制度としての学校の中でのみ生きている子どもが、学校外で自分の生き方のモデルとなるような大人に出会う機会は極めて少ない。多くの「青年」は、生き方のモデルを見いだすことが

できなくても、そこにとどまるしかない。自分の将来に不安を覚えたとしても、学校の提供するみちすじをひたすら辿り続ける以外に、「青年」にはこの時期を生きる術がないのである。

常に自分が次にとるべき行動を助言してくれる学校で、人生の大半、10年以上を順調に生活し続けてきた「青年」は生き方のモデルを必要としない。次に自分がとるべき行動を誰かが助言あるいは指示してくれればよいのである。もちろん生き方のモデルを探すこともしない。そのような「青年」にとって、制度としての学校から離れるということは、一種の根こぎ体験ともいえるほどの脅威的を感じさせるものだろう。つまり、現代日本の「青年」は、心理的に、制度としての学校から離れられないのである。これが、現代日本の青年期にある若い人々の心理的な状況といえるだろう。

自分が次にとるべき行動を自ら決定するのが大人である。しかし、現代日本の「青年」は、制度としての学校、すなわち子どもに次にとるべき行動の助言や指示を与える仕組みに依存し固執していて、そこから離れることを怖がっている。これが現代日本の「青年」が、大人にならない原因ではないかと考える。

### 3. 共通感覚と青年期

一方、子どもは長期間（最短で9年間、最長では20年間ほど）、制度としての学校という社会の中で過ごす。大人になるまでの時間の大半を学校という社会で過ごすのである。その学校は、特殊な社会集団である。まず、ほぼ同年齢集団である点が特殊である。次に、その同年齢集団は、ほぼ同一の地域に居住する子どもによって構成されている。さらに、その同年齢集団が同一の課題に一斉に取り組むように計画されている点も特殊である。この場合の特殊さは、次のようなものである。その集団で一斉に同一の課題に取り組んでも、課題に取り組むのは個々人であるから、当然その課題への取り組み方や達成度などに差異が生じる。しかしそこでは、どのように課題に取り組んだかとか、課題を達成できたかどうかなどは取り上げられない。集団の構成とは全く無関係なのである。どのような差異があったとしても、同一年齢集団は長期間続く。大多数の子どもは、他の年齢集団と混じり合うことがないだけでなく、その他のどのような集団であれ混じり合うことがないまま、長期間を過ごすのである。

この特殊な社会集団の中で子どもは6～9年間を過ごして、青年期といわれる時期に達する。この閉鎖社会の中で子どもは何を経験するのだろうか。

大人になるということは、人がその社会の持つ共通感覚を形成する過程であるということができよう。われわれの知覚や認知は感覚（聴覚・視覚・触覚・嗅覚・味覚）をもとにしている。われわれの多種多様な経験は、すべてこの感覚を通して個々人に入り、記憶され、分類整理され、必要に応じて利用される。感覚は極めて個人的なものであるから、経験を共有するということはできない。それにもかかわらず、われわれは相互にわかり合えると感じることができる。この相互にわ

かり合えると感じる時にわれわれの中で働いているのが共通感覚である。この人が相互にわかり合う基盤となる共通感覚を形成することができるようになって、子どもの大人への移行が完了するといえるだろう。

しかるに、特殊な社会集団の中で過ごす子どもには、社会の持つ共通感覚を形成する機会が極めて少ない。子どもは毎日接するのは、同一年齢の子どもである。子どもに与えられる課題も同一である。このような集団の中で過ごす子どもの経験は限定的にならざるを得ない。子どもは、限定された人と時間と場所で、限定された経験のみを積むことになるのである。

さらに、現代社会は感覚の中で特に視覚が優位の文化を持っており、人が社会を形成する基盤である共通感覚をゆがめているという指摘もある。現代社会では、視覚という感覚のみに頼って相互に理解し合おうとしている、ということである。人と人との関係を形成する上で、視覚が優先されているということだ。

たとえば、人が話しているのを聞くよりも、文字にしたものを読むほうが確実に理解できると考える人が多い、というのは、視覚が聴覚に優先しているということである。聴覚により得られる情報よりも、文字に書かれた情報のほうが間違いない、ということだ。聴覚により得られる情報には、話している人の声の大きさや調子や息遣い、言葉の区切り方など、話している内容を補う情報が豊富に含まれる。聴覚により得られるから、話し手の話の内容に対する思いを感じ取ることもできるだろう。それらの情報は、文字にされるとすべて切り捨てられてしまう。文字すなわち視覚情報では話し手の思いが抜け落ちてしまうということに気づいているかどうかはわからないが、現代社会では文字に書かれた情報を重視する人が多い。

視覚情報重視の現代社会にあっては、人と人が相互に理解し合い、関係を形成するために不可欠な共通感覚が形成されにくい。視覚情報重視の社会では、聴覚はもちろん、触覚や嗅覚は限定的に使われるにすぎない。われわれはある人をその人と特定する際、決して視覚情報だけに頼っているだけではない。足音や衣擦れの音もその人を特定する手がかりであるし、においやぬくもりもその人固有のものである。これらの情報がその人の姿かたちという視覚情報を補って、その人であることを確認するのである。ちなみに、乳児は匂いで母親を識別できる。われわれが相互に理解し合うためには、相手がその人自身であることを、五感を通して確認し合うことが必要なのである。

現代は視覚情報重視社会である。その中では、視覚以外の感覚は切り捨てられ、この共通感覚が形成されにくい。そしてこの共通感覚の欠如が、人と人との関係をぎくしゃくしたものにしているのである。

このような現代社会にあって、限定的な経験しか持たない子どもが青年期に達した時、大人への移行は難しいだろう。つまり、学校という限定的な集団の中で視覚優先の訓練を受けてきた子どもにとって視覚以外の感覚は、使い慣れない、使いにくいものであるに違いない。まして共通感覚に気づくことは難しいだろう。

それゆえ、現代の日本社会にあって青年期の課題は、「青年」が自分の五感に気づき、共通感覚を取り戻すことであるといえるだろう。今、大人にならず、いつまでも青年期にとどまる多くの現代日本の「青年」が共通感覚を取り戻す時、その人々は青年期の発達課題を達成し、大人へと移行していくことができるのだろう。

#### 4. 今後の課題

心理学における青年あるいは青年期の研究は多岐にわたっている。

日本に心理学が学問として導入された当初、研究対象はもっぱら知覚や記憶、児童であった。現在の青年研究が対象としている諸問題は、いわゆる日々の労働とは無縁のごく一部の恵まれた人々にのみ生起するもので、一般的な心理学研究対象とはならなかった。現在の心理学が「青年」としている年齢の人々のほとんどは、当時は成人、大人ととらえられていたのである。

「青年」を対象とした心理学の研究が行われ始めたのは、1945年以降である。当時の研究は主に青年の認知発達（概念形成）と青年に対する指導法であった。その後、不登校（学校恐怖・登校拒否）など「青年」の社会的不適応行動や臨床心理、人格発達などが研究の中心的テーマとなっていった。また近年、「青年」をライフサイクルの中でとらえようとする研究もみられるようになってきた。

このような青年期研究の動向は、「青年」を子どもから大人への移行期としてとらえるのではなく、生涯にわたって続く発達という変化の過程の一時期としてとらえようとする方向にあると考えられる。発達は連続的な変化が一生続くというとらえ方である。これは、発達段階という括りで「青年」をとらえようとする研究から、変化する側面とその変化をもたらす要因とを明らかにしようとする研究へと、研究の方向が変化したということである。

今後上に述べた、「青年」の共通感覚の再開発について考えていきたい。

#### 参考文献

- P. アリエス *L'Enfant et la vie familiale sous l'Ancien Regime* 1960（「子供の誕生」杉山光信他訳 みすず書房 1980）  
東洋ほか編「発達心理学ハンドブック」福村出版 1992  
岡田努「現代青年の心理学」世界思想社 2007年  
E. ケイ *Barnets Arhundrade* 1927（「児童の世紀」富山房百科文庫 24 小野寺信ほか訳 富山房 1975）  
清水論 象徴として「青年」に関する研究 その1 筑波大学体育学系紀要 Vol. 6 1993  
中村雄二郎「共通感覚論」（岩波現代文庫）岩波書店 2000年  
森良和「歴史の中の子どもたち」学文社 2003年  
八木成和 青年期の対人関係に関する研究(Ⅲ) 四天王寺国際仏教大学紀要第35号 2008  
文部科学省 平成18年度学校基本調査 2007